

日本グループ・ダイナミクス学会会報

ぐるだいい

JGDA
ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/index.php>第37号
(2010年7月30日)

発行所：〒739-8521 東広島市鏡山1-7-1

広島大学大学院総合科学研究科行動科学講座 浦光博研究室

日本グループ・ダイナミクス学会

e-mail: sec-general@groupdynamics.gr.jp

発行人：浦 光博, 編集担当：西田 公昭

《 目 次 》

- § 第57回大会 (於 東京国際大学) へのご案内：角山 剛…………… 1
- § 国際学会大会参加報告…………… 2
 アジア社会心理学会第8回大会参加報告
 西浦 真喜子／浅野 良輔／中山 真
 Society for Personality and Social Psychology (SPSP) 2010 Meeting参加報告
 相馬敏彦／大高瑞郁
- § 社会心理学者かくつぶやきけり：ツイッターに関する論考：三浦麻子…………… 6
- § 常任理事会からのお知らせとお願い…………… 8
 役員選挙について：相川 充
- § 事務局からのお知らせとお願い／広報担当からのお知らせ／諸連絡先 …… 9

★★ 第57回大会 (於 東京国際大学) へのご案内 ★★

大会準備委員長 角山 剛 (東京国際大学)



日本グループ・ダイナミクス学会第57回大会も、いよいよ間近に迫ってまいりました。今回大会は私ども東京国際大学でお引き受けいたしました。今大会の予約申込は、139名、また、ワークショップ3件、ロング・スピーチ3件、ショート・スピーチ27件、English Session5件、ポスター発表53件のお申し込みをいただいています。シンポジウムは「チーム・マネジメントの心理学」をテーマに、公開制といたしました。いずれも多くの皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

広報担当常任理事の西田公昭先生からもご要望をいただきましたので、この機会を利用して、東京国際大学の所在地である埼玉県川越市について、少しご紹介をいたします。

大会第1号通信でもご案内いたしました、川越は池袋から東武東上線急行で30分ほどの距離にあります。古くは小江戸(こえど)と呼ばれ、多くの名所や旧跡が散在しています。昨年のNHK朝ドラ「つばき」の舞台にもなりましたので、ご存じの方も多いかと思います。この地の豪族で鎌倉幕府の有力御家人であった河越太郎重頼の娘は、源義経の正妻であったそうです。「いぎ鎌倉」の折には、この地からも多くの兵士が鎌倉

を目ざしたことでしょう。下って、江戸時代の焼き芋屋は、看板に「十三里」と書いたそうですが、これは日本橋から川越札の辻までの十三里を、「栗（九里）より（四里）うまい」とかけた洒落とのことです。当時からさつまいもは川越の名物であり、市内にはさつまいも料理の割烹などもあります。

市内にある喜多院（図1）には、徳川家三代将軍家光の乳母であった春日局（かすがのつぼね）の化粧の間が移築されています。また境内にある五百羅漢（本当に五百体以上の石仏があります）は、よく見ると自分の顔に似た羅漢さんが必ず一体いるということです。

川越を紹介するときには必ず出てくるのが「時の鐘」です（図2）。江戸時代に建てられた櫓と鐘は明治26年の川越大火で消失し、現在は二代目ですが、川越のシンボルとして今でも日に四回の時の鐘を響かせています（残念ながら大学からは聴くことができません）。

蔵造りの町並みと菓子屋横町も、同じく川越のシンボルです（図3、図4）。蔵造りの町並みは川越大火で多くの家屋が消失した後、燃えにくい建物として増えていったものです。現在は電線も地中化され、美しい蔵造りの家並みを散策することができます。菓子屋横町も災害と関係する歴史をもっています。こちらは関東大震災の後、東京に代わって菓子の製造供給を行ったことから、多くの菓子職人が集まり、その名前が広まりました。現在も20軒以上の店で昔懐かしい味を楽しむことができます。前日、あるいは大会終了後（期間中はぜひ大学にお越し下さい）の川越散策もぜひお楽しみ下さい。川越駅前から巡回バスも出ております。

今大会の会場となる第1キャンパスは、川越駅から2つ目の霞ヶ関駅下車徒歩5分の距離にあります。初日懇親会では、さつまいもを原料にした川越の地ビール、地酒（県内には35の酒蔵があります）を取り揃えて、遠来の皆様に歓迎したいと存じます。スタッフ一同、あらためて皆様のご参加を心よりお待ちしております。



図1 喜多院



図2 時の鐘



図3 蔵造りの町並み



図4 菓子屋横丁

★★ 国際学会大会参加報告 ★★

★☆☆ アジア社会心理学会第8回大会参加報告 ☆☆☆

西浦 真喜子（大阪大学大学院人間科学研究科）



2009年12月11日から14日の4日間、インドのデリーにて開催されましたアジア社会心理学会に参加・発表してまいりました。実験社会心理学研究にも本学会への参加報告記を書かせていただきましたが、会報にも書かせていただけるということで、こちらはさらに赤裸々な感想等を綴ろうと思います。

インドへの渡航に先立って、さまざまな脅しをいただき、水道をひねったら色のついた水が出てくるのだ、水を透かして見たら何かが泳いでいるのだ、もう日本には帰って来られないのではないかという気分させられました。また、ビザの手配のためインドの申請センターに何度も電話したり通ったりしたおかげでセンターの方とも顔見知りになりました。そのような渡航準備にかかった時間は、発表ポスターの準備よりも時間を費やしたかもしれません。

飛行機の中では機内食が複数回出ましたが、回数を追うごとにメニューが次第にカレーっぽさを増し

ていき、インドの地が迫っていることを機内でも感じる事ができました。その後ようやくインドの地に降り立ったときは、みんな空を見上げてその煙り具合にため息が漏れました。空港からホテルまでの道のりはインド第一の驚きで、道路を走る車のスピードと車線変更の多きに舌を巻いてしまいました。タクシーの運転手さんはそんな中にもかかわらず、私たちに各国の領事館の場所や夜は結婚式が多く行われていることなどを丁寧に教えてくれました。

ホテルは非常にきれいで過ごしやすかったです。私たちの泊まったホテルには当時のアジア社会心理学会会長であったNg先生と奥様も宿泊されていらっしゃいました。去年の日本社会心理学会・日本グループ・ダイナミクス学会合同大会では、先生をシンポジストとしてお招きしました。その際に、空港までお迎えに行きお食事をご一緒させていただいたのですが、そのことを覚えていただいて話しかけてくださり、大変感激いたしました。また、奥様とは朝食もご一緒することができ、とても気さくに話して下さったことは身に余る光栄でした。

学会会場であるインディア・ハビタット・センターは、植物や色鮮やかな鳥も目にすることができる文化施設です。ポスター発表は青空の下で行われ、実に開放感あふれる場での議論となりました。そこでは、国や年齢、性別を問わず様々な研究者が気軽に声を掛けあえました。特に、途上国の方からは積極的に先進国の発展を学ぼうという意欲の強さがうかがわれました。同時に、自分たちのことをもっと発信したいという姿勢も強いように思われました。私は、韓国の学生の方に質問を受けました。その際、質問するだけでなく、自分のポスターのことも主張する姿勢は私には新鮮に感じられました。自分の研究発表、学会参加の仕方を改めて見直しました。さらに、アジアの方々の英語でのコミュニケーションの堪能さもすごいなぁと尊敬するとともに自分を見直すきっかけとなりました。

ニューデリー、デリー市内を観光する時間もあり、インド門などに行きました。その際はリキシャーというスクーター型のタクシーのようなものを利用したり、普通のタクシーにも乗ったりしましたが、なかなか目的地に連れて行ってくれず困ったものです。「マーケット、マーケット！」という単語が飛び交い、インドの特産品が盛りだくさんのお店を勧められました。そして、特筆すべきはインドの街中を歩いていて目にした、家族の姿です。下半身が裸のままの子どもや道端にテントを張って生活する家族の様子に衝撃を受けました。また、車での移動の際には停車すると必ず子どもや親子が物売りに来ました。風船やボールペンを抱えていたり、窓ガラスを拭いたり、悲痛な顔で訴えかけてきたり…。私は自分の無知無力さを感じるとともに、これから目指すべき世界を考えさせられました。

そしてもちろん、お決まりのように帰ってからしばらくはおなかの調子が悪かったです。全体を通して、今回のインド渡航では、今まで知らなかったことを知るとい素晴らしい体験ができました。自分の世界を広げることに今後も努めようと、思いを新たにしました。そして、他国の研究者とも交流を深め、自身を磨き、国内にとどまらずより多くの場に研究を還元したいという思いを強く抱きました。まさに、本学会のテーマの1つであったアイデンティティを、研究者としてのアイデンティティ、そして日本人としてのアイデンティティとして確認する機会であったと言えます。

最後になりましたが、発表を支援していただきました日本グループ・ダイナミクス学会に深く御礼を申し上げます。ありがとうございます。

浅野 良輔 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)



2009年12月11日～2009年12月14日に、インドのデリーで開催されたアジア社会心理学会第8回大会に参加してきました。一般的に、インドといえば、激しい雨と蒸し暑さの過酷な気候を思い浮かべられる方が多いことでしょう。しかし、この時期は乾期に当たるため、滞在期間を通して晴天が続き、とても快適に過ごすことができました。ただし、空港やホテルから一歩外に出ると、埃と独特な臭いに悩まされましたが、それも今となってはよい思い出です。

会場のインド・ハビタット・センターは、インディラ・ガンディー国際空港からタクシーで20～30分ほどのところにありました。ここで、運転手が不当な運賃を請求してくる恐れがあることには注意しなければなりません。油断をすると、彼らはわざと遠回りをしたり同じ道を何度も行ったり来たりします。幸いにも、私たち一行は正直で親切な運転手に巡り合い、移動にも困らなかった上に、よいお土産店を紹介してもらうことができました。

さて、大会には、アジアのみならず、各国の研究者が参加していました。他の国内外での大会と比べ、とても和やかな雰囲気だったのは、インドの風土や国民の気質も相まってのことだったのでしょうか。屋外に設置されたポスター会場では、強い日差しを浴びながら議論をする参加者たちの姿が印象的でした。また、昼食では、数種類のカレーをはじめ、様々なインド料理が振る舞われました。最近では、日本でもインド料理店が増えていますが、本場のカレーとナンの味はやはり格別でした。

今回、私は初めてアジア社会心理学会に参加しました。最も印象深かったのは、国内や欧米の学会ではみられない、アジア特有の問題意識に基づいた発表が多かったことです。特に関心を持ったのは、韓国の方が発表されていた北朝鮮脱北者の心理的適応についての研究でした。アジア圏の国や地域、経済情勢、宗教にまつわる諸問題に対して、社会心理学がいかんにして貢献できるのかを考えさせられました。

また、私自身の発表にも、多くの研究者が関心を示していただき、主に理論や分析手法について質問や意見をもらうことができました。私のような大学院生にとって、国際学会でのこうした経験は、研究室で悶々と思索してきた日々が報われたと思える瞬間であり、研究のさらなる発展に向けた動機づけを高めてくれるものです。今後はこれまで以上に研鑽を積み、次は自分が海外の研究者たちに刺激を与えられるようになりたい、という思いを強くしました。

ところで、今回のインド渡航は、学会参加だけでなく、デリー周辺の散策も自らの見聞を広げる機会となりました。中心部のコンノート・プレイスは、たくさんの商店でにぎわっており、日本とは一味違ったエネルギーの強さを感じました。また、移動時の車窓から見える景色は、先進国と同様の高層ビルやショッピングモールが建設された場所と、インフラ整備の著しく遅れた場所が入り乱れていました。インターネットやガイドブックで知ってはいたものの、信号待ちの際に女性や子どもが必ず物乞いにやってきたことには、大変驚きました。彼らを目にするたび、同情とともに、幸いにも自分が恵まれた環境にいることに安堵したものです。このような貧困層と、学会参加者のような富裕層の混在は、インドが「現代のひずみ」の象徴であることを大いに物語っているでしょう。

最後に、大会を滞りなく運営してくださったアジア社会心理学会やスタッフの方々のご苦勞・ご尽力に対して、深く感謝いたします。彼らの高いホスピタリティのおかげで、とても有意義なインド渡航となりました。中国で開催される次回の大会を心待ちにしつつ、アジア社会心理学会がより一層発展することを祈念しております。

中山 真 (名古屋大学大学院教育発達科学研究科)



私はこのたび、日本グループ・ダイナミックス学会のアジア社会心理学会発表支援制度による補助をいただき、2009年12月11日から14日までインド・デリーにて開催されましたアジア社会心理学会第8回大会 (AASP2009) に参加させていただきました。

今回の発表で私は、恋愛関係崩壊後のストレス関連成長について発表を行いました。ストレス関連成長とは、ネガティブと思われる出来事を通じて得られるポジティブな成長感のことです。これまで主に、病気の罹患、暴力被害、死別、戦争・テロのような非日常的で、生死にかかわるようなストレスの非常に強い出来事による成長感が対象とされてきました。私は、より日常的なストレスイベント

でも成長感が得られるのではないかと考え、青年期に多くの人が経験する恋愛関係の崩壊を取り上げ、崩壊した関係形態や立場 (交際関係の破局/片思いの失恋、関係解消の主導権) とアタッチメント・スタイルの影響を検討しました。ポスターには多くの方々に立ち止まっていただき、用意していた配布資料もすべて配りきってしまいました。ある程度関心を集めることができたのではないかと、今後の研究活動に当たっての大きな励みとなりました。しかしながら、質問をされた際にスムーズにディスカッションが十分に出来たとは言えず、その点は悔いが残りました。英語を読み書きすることだけでなく、自由に英語を話せる能力を身につけられるよう、今後も努力しなければならないことを痛感しました。

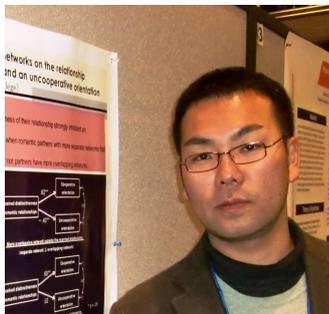
そして、実はこのインドへの学会参加が、私の初の海外渡航でもありました。学会参加だけでなく、海外の異国の地へ赴くということだけでも、貴重な経験になったと思います。学会会場でも、ランチにカレーをはじめとするインドの料理を堪能できましたし、国内の学会でも配布される紙袋やエコバック代わりに手渡されたバッグも、インドの世界遺産がデザインされた特徴のあるものでした。一方で、現

地の空港に到着してからホテルに向かうまでの間、物乞いの女性や子どもが信号で停車中の車に寄ってくるような光景を目の当たりにしました。滞在中は、インドの文化、服装、街並み、食事など、様々な面で自国との違いを体感することができました。しかし、自分を含め、インドに渡航した日本人の参加者の多くが、帰国前後には体調を崩したと聞いています。恵まれた環境に生活する日本人にとっては、ややタフな国であるとも言えるでしょう。学会に参加して得られたことはもちろん、この地を訪れて経験したことは、全てとても貴重なことだと思います。今後の研究活動に何らかの形で生かしていければと思います。

最後になりましたが、このような貴重な経験が得るチャンスを与えて頂きました、日本グループ・ダイナミクス学会に深く感謝いたします。ありがとうございました。

★☆☆ Society for Personality and Social Psychology (SPSP) 2010 Meeting参加報告 ☆☆☆

相馬敏彦 (川口短期大学)



2010年1月、SPSP第11回大会に参加した。開催地がラスベガスということもあり、例年になく参加者が多かったようである。以前から、“真面目に参加した研究者がもれなく周囲にすすめる学会”として関心があった中で、少々、観光資源にもひかれつつ参加した。もちろん、学会発表・参加が主目的である。入国審査時に滞在理由を尋ねられてそう答えたら「あんたが発表するのか？」と厳しい目ですごまれ、ややびびってしまったが、これは主目的が疑われているのではないかという欺瞞検知に起因するものではない。発表内容をこの審査官に手短かに説明しきれぬか不安になったことに起因する。幸いこの心配は杞憂に終わった。

「全ての道はカジノを經由」という街全体のコンセプトに違わず、学会会場となったホテルのホールにもやはりカジノを素通りして行かなければならなかった。自身の発表は初日の夕方。もちろん、素通りして会場へ向かう。ポスター発表ではあったが、予想以上に多くの方にハンドアウト資料を持ち帰ってもらうことができたし、後々メールでの反応まであったのでまあよしとしよう。翌日の昼、ランチボックスに入っていたむき出しのリングにかじりつこうとしていると、同席した米国人男性から「どっから来たんだい？」と尋ねられ、入国審査時の記憶がよみがえる。が、優しいまなざしに加え、日本になじみがあるという話を聞いて交感神経の緊張もすぐにほぐされた。

他の発表を回って印象に残ったことの一つは、個々の研究で用いられている研究手法や解析手法であった。見慣れない分析手法も散見されたが、どちらかといえばシンプルなデザインながらも、いや、それゆえに説得力のあるものが多かったように思う。個人的に印象深かったのは、虐待など対人関係上の問題に積極的にアプローチしようとするものも少なくなかった点だ。学会の特徴を反映しているのかもしれない。

会場となったホテルの対面には、ストラトスフィア・タワーという建物があった。学会の合間に一度立ち寄ったのだが、そこには、高さ300m以上の屋上から外側に突き出すように滑り出すシーソーのごとき恐ろしい乗り物が体験できるようになっていた。何が恐ろしいかといえば、まず怖い。なのに、金をとる。おっさん3人で行ったのだが、「お前、行ってみろや」、「ならお前乗れや」という初ジェットコースターを前にした小学生男子のような会話を展開してしまった。今思い返しても恥ずかしいが、あの会話、ちょっと楽しかった。何でだろう？主目的を建前に、結局、誰も乗らなかったことはいうまでもあるまい。話しがそれたついでに、(もちろん、主目的をおかさない範囲で)観劇したショーの報告もしたいが未来の観劇者にとってネタバレになってしまいそうなのでやめておこう。しいていけば、“オー”よりも“カー”がおすすだ。

時差ぼけを解消する余裕もないほどの短い滞在だったが、もちろん、主目的を中心に充実した時間を過ごすことができた。ぜひ来年も参加しようと、この原稿を書きながら、サンアントニオで開かれる第12回大会のエントリー手続きを済ませた。

大高 瑞郁 (山梨学院大学)



2010年1月28日から30日にLas Vegasにて開催されたSPSP (Society for Personality and Social Psychology)の第11回大会に参加した体験をご報告させていただきます。

SPSPで私が最も感銘を受けたのは、“Basic Building-blocks of the Social-Relational Mind (Thomsen, L., & Baron, A. S.)”という題名のシンポジウムでした。このシンポジウムは、“ultra-social species (Brewer, 2007)”である私たち人間にとって、非常に重要である「社会の構造・機能を理解する心の発達」を、乳幼児を対象に検証した4つの研究から構成されていました。そのなかで、とくに私が興味を惹かれたのは、Over, H., & Carpenter, M.の “Priming third-party affiliation and ostracism increase helping and affiliative imitation in infants and children”です。これは、生後18ヶ月の幼児を対象に、2体の人形たちが肩を組んでいる写真を見ることによって、幼児の他者への援助行動が促進される一方、人形ではなくブロックが並んでいる写真や、2体の人形たちが互いにそっぽを向いている写真を見ても、援助行動は促進されないことを実験で示した研究です。そして彼らは、このような結果が得られた理由を、第三者たちの友好的な関係が、幼児の所属欲求を駆り立て、他者への援助行動を引き起こすからだと論じていました。この実験結果を現実場面に置き換えてみると、子どもが、仲の良い両親や兄弟、友達を見ることによって、他者を援助する可能性が考えられ、社会的にとっても意義深い研究だと感じました。

また、今回のSPSPはLas Vegasで開催されましたので、参加された皆様は学会以外も大いに楽しまれたことと存じます。Las Vegasといえば勿論カジノが最も有名なのですが、ホテル内の劇場で様々なショーを観ることが出来るのも魅力のひとつです。というわけで、観劇に精通されている方々に導かれて、毎晩のようにショーを観たのですが、そのなかで、私が最も感激したのは、シルク・ドゥ・ソレイユ (CIRQUE DU SOLEIL)の“KA”です。このショーは、MGM GRANDホテル内にある専用の劇場で行われるのですが、この劇場の造り込み方が完璧で、劇場に入った途端、“KA”の世界へ引き込まれます。そしてショーでは、人間の身体能力の限界を超えるかのような素晴らしい演技が次々と披露され、私は、ただただ感動すると共に「人間、頑張れば何でも出来るのだな、私も頑張っていこう」と気持ちを新たにすることができました。Las Vegasを訪れる機会があれば、是非ご覧になることをお勧め致します。

最後に、この場をお借りして、お世話になった皆さまに感謝の意を述べさせていただきます。一緒に観劇してくださった皆様、観劇の楽しさを教えてくれた森先生・稲増くん、そして同行してくださった尾崎さん・道家さん、本当に有難うございました。私がSPSPを満喫できたのは、心温かい皆さまのお陰です。今後とも何卒よろしくお願ひ申し上げます。

★★ 社会心理学者かくつぶやけり：ツイッターに関する論考 ★★

第1回 基本的なしくみの解説と一利用者としての感想

三浦 麻子 (関西学院大学)



Twitter (<http://twitter.com>; ツイッター) は、2006年にサービスが開始され、2009年頃から日本でも多くの利用者を集めているCMCメディアである。このツイッターとはいったい何ぞ、についてグルグイ会員に向けて解説せよ、というお題を頂戴したのが本稿である。調子に乗って書いたら随分な字数になってしまい、2回に分けて掲載していただくことになった。第1回では、基本的なしくみを解説した後に、ユーザとしての立場から見たツイッターについて考える。

まずツイッターの基本的なしくみと機能について、他のCMCと比較しながら解説する。ツイッターにおける「発言」はTweet (ツイート) と呼ばれ、日本語では「つぶやき」と称されているが、具体的には140文字以内のコメントを投稿することをさす。ツイートに頻出する「なう」「だん」といった語は、この字数制限に配慮した節約的なコミュニケーションを志向するユーザが生み出した符牒である。140文字/ツイートという制約は万国言語に共通だが、それが全角か半角かは頓着されな

い。つまりTwitterもツイッターと書く方が節約的である。日本語は1ツイートあたりの密度がアルファベットを使用する言語よりも相対的に濃い言語であり、この制約はおそらくコミュニケーションに質量ともに顕著な言語差を生じさせているだろう。

ユーザ同士のコミュニケーション関係は基本的にフォローと被フォローにもとづいて成立する。しかしTwitterと同様に多くのユーザを擁するSNS (mixiなど) とは異なり、両者は双方向的とは限らない。フォローによって他者とつながること、そして一旦つながった他者とのつながりを切る (フォローを外す) こと、これら両方のアクションを起こす際の敷居が低いこともツイッターの特徴である。2009年のOxford Word of the Year に「unfriend」すなわち「SNSで誰かを友達リストから外す」という意味をもつ単語が選ばれたことは記憶に新しいが、SNSで新しいつながりを持つ際は両者間で依頼-承認の手続きが必要で、だからこそそれを「切る」ことにはそれ相応の重い意味も生じうる。ツイッターにはそれが無いのである。

図1に典型的なツイッターの画面例を示す。あるユーザがフォローしているユーザのツイートと、文中に当該ユーザへの言及を含むツイートが時系列降順で表示されている。これをタイムライン(TL)と称する。最上部の記入フォームに入力することでツイートを投稿できるが、その際に文頭に「@ユーザ名」をつけるとそのユーザへのリプライとなり、そのツイートは発言者・当該ユーザ・かれらの両方と相互フォロー関係にあるユーザのTLにのみ表示される。つまり緩やかに排他的なコミュニケーションも成立させうるしくみである。とはいえ、あらゆるツイートは「http://twitter.com/」にユーザ名を付加したURLにアクセスすれば、「ツイートをプロテクトする」設定にしていないユーザのツイートは、誰でも (ツイッターのユーザでなくとも) 閲覧可能である。この点も、基本的にユーザ内に閉じたコミュニティである (あった) SNSとは異なる。

ユーザ同士で特定的话题を共有したい場合によく用いられるのがハッシュタグで、発言末尾に「#特定の文字列」 (例えば#jgda) を付加することを指す。ツイート内のハッシュタグには自動的に「当該語でツイッター内を検索した結果」へのリンクが張られ、話題ベースでツイートが共有できるというしくみである。学会大会や研究会単位で任意のハッシュタグが決められ、関連ツイートをまとめて参照可能にするという試みがよく行われている。また、

USTREAM(<http://www.ustream.tv/>)など動画共有サービスとの連携の際にも有用である。

ツイッターユーザ内の自然発生的な文化として始まり、後に公式サービスに取り込まれた機能にリツイート(RT)がある。これは他のユーザのツイートを再投稿 (すなわち転送) することである。前述したように各ユーザのTLにはフォローしているユーザによるか「@各ユーザ名」が含まれているツイートしか表示されない。つまりあるユーザAのツイートを readしたAのフォロワーBがそれを自分



図1 ツイッターの画面例

のフォロワー（のうちAをフォローしているユーザ以外）に周知するためには、当該ツイートを再投稿するのがもっとも手っ取り早い手段なのである。これが繰り返されることで、スノーボール式にあるツイートが本人のフォロワー数を遥かに上回る人数のユーザに到達することもある。元ツイートの文頭にRTという文字列を付すことによって行われ、その前後に再投稿者のコメントが付加されることもある（ただし公式機能としてのRTでは元ツイートの改変は一切許されない）。

ではこのツイッターとはユーザにとって何なのか。かれらはほとんど誰一人として「ある特定のコミュニケーションが展開されている場」を共有していない。それゆえに「ツイッターはこんなところ」と一般論を述べることは難しいので、個人的な利用経験にもとづく感想を述べる。私のもっとも重視しているツイッターの機能は、同業者たちが「つぶやき」を介して「集う」互酬的コミュニティの提供である。この原稿執筆もツイッター経由でご依頼いただいたし、他にも類似した事例を見聞きすることは珍しくない。勤務先では購読してくれないScienceの最新論文を「読みたいなあ」とつぶやいてから授業に行き戻ってきたらそのPDFが手元にあるといったこともしばしばだ。しかし、あくまでも「つぶやく」場であって「集っている」ことを過度に意識させないようなしくみが、そしてそうした限定的なコミュニティ機能に特化しているわけでもないところが、大いに気に入っている。

ちなみに、本稿執筆にあたって「もっとも私がリブライしているフォロワー」を調べてみた。するとそれは同じ学科の同僚で、おーいと呼べばなんだと答えてもらえるくらいの至近距離にいるユーザであった。どうやら私にとってのツイッターは、究極のグローカリゼーション(Wellman, 2002)ツールとなりそうである。

第2回では研究者としての観点からツイッターを眺める予定である。なお、本稿へのコメントは是非ツイッターで、ハッシュタグ #gdnews37 をつけたツイートにて。

ネットレイティングス株式会社 (2010). 「mixi」の訪問者数が1,000万人を突破、Twitterも急成長を維持 http://www.netratings.co.jp/New_news/News04272010.htm

Wellman, B. (2002). Little boxes, glocalization, and networked individualism. In M. Tanabe, van den Besselaar, P. & T. Ishida (Eds.) Digital Cities II. Springer-Verlag, Berlin (Pp. 11-25).

★★ 常任理事会からのお知らせとお願い ★★

役員選挙について

担当 相川 充

本年度は、次期（2011-2012年度）の役員選挙を実施する年に当たっております。以下の日程で実施する予定です。会員のみなさまには、選挙台帳の作成にご協力くださるとともに、積極的に投票してくださいませよう、お願い申し上げます。

- 9月中旬：選挙台帳（案）を送付
- 10月下旬：選挙台帳（案）異議申し立て締め切りと選挙台帳の確定
- 11月中旬：役員選挙（会長、理事、監事）の投票用紙、選挙人名簿などの送付
- 12月上旬：投票締め切り
- 12月中旬：役員選挙（会長、理事、監事）開票
- 1月上旬：理事の互選による常任理事選挙
- 2月上旬：選挙結果の確定と公表

★★ 事務局からのお知らせとお願い ★★

◆研究の国際化支援制度が発足しました

今年度より研究の国際化支援制度がスタートしました。この制度は、本学会会員の研究の国際化を支援するため、会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際に英文校閲代金の一部を補助するものです。年齢制限などございませんので、皆様奮って申請してください。応募の詳細は学会ホームページをご覧ください。また、実験社会心理学研究50巻1号巻末の会務報告欄にも掲載いたしております。

◆実験社会心理学研究、教育・社会心理学研究の電子アーカイブ化について

実験社会心理学研究（および前身誌の教育・社会心理学研究）は、（独）科学技術振興機関の電子アーカイブ対象選定委員会によって、電子アーカイブ化される対象誌として選定されました。

昨年度事務局を中心に確認作業を進め、現在JSTによって最終のアップロード作業が進められています。一部既にアップロードされ、ご覧いただけるものがございます。

URLは、以下のとおりです。ご参照ください。

http://www.journalarchive.jst.go.jp/japanese/jnltop_ja.php?cdjournal=jjesp1971

今後、各種検索サイトとのリンクも行われる予定です。是非一度ご利用ください。

◆実験社会心理学研究の特集テーマ募集

「実験社会心理学研究」には、グループ・ダイナミクスや社会心理学に関連する特集を掲載します。特集は、読みごたえのある論文3編程度で構成します。特集についての企画をお持ちの会員は、企画の趣旨、特集論文の概要等をまとめた企画書（A4版1-2枚程度）を、編集委員長に提出して下さい。企画の採択については、常任編集委員会で審議、決定します。特集論文の審査手順など詳細については、学会ホームページに掲載してあります。

URLは、以下のとおりです。ご参照ください。

http://www.groupdynamics.gr.jp/journal/event_info.html

なお、「実験社会心理学研究」は、特集の掲載によって、一般投稿論文の掲載に大幅な遅滞が生じないことを重視しています。企画を提出される方は、この点をお含みおき下さい。

◆実験社会心理学研究の書評候補募集

事務局では、実験社会心理学研究の書評の候補となる著作を随時募集致しております。よい本がありましたら事務局までご推薦ください。

★★ 広報担当からのお知らせ ★★

◆JGDA_Flash：グルダイでは【日本グループ・ダイナミクス学会 広報（速報）メールマガジン】（JGDA_Flash）を運用しています。これは、速報性が要求される情報・ニュースを会員のみなさまにe-mailでお知らせしようとするものです。現在登録されている会員は約600名です。グルダイ会員のみなさまの中には、会員名簿にメールアドレスを掲載されていない方や最近アドレスを取得された方、またアドレスを変更された方なども少なくないのではないかと思います。登録、メールアドレスの変更、配信停止の連絡、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等は、以下のアドレスのグルダイ広報メールマガジン運営担当マスターにお願いいたします。

office@groupdynamics.gr.jp

◆会員の皆様がお書きになった新著を、400字程度でご推薦いただき、上記までメールにて随時ご送付いただきたいと思います。なお、ご推薦の文書はなるべく著者でない方に書いていただき、ご著書に関

する出版社等の情報とともに、その推薦の方のお名前とご所属などお書きくださいますようお願いいたします。これまでに掲載された記事は以下のWEBで閲覧できます。

<http://www.groupdynamics.gr.jp/bookreview/index.html>

◆研究会案内等についてのニュース記事の掲載希望も大歓迎で受けつけています。上記のアドレスまでお送りください。なお、これまでに配信されたFlashは、以下のWEBで閲覧可能です。

<http://www.groupdynamics.gr.jp/cgi-bin/magbbs2.cgi>

★★ グルダイ学会関係連絡先 ★★

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌・ニュースレターの未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

◆【事務支局】住所・所属変更、その他お問い合わせは

中西印刷株式会社 学会部 (日本グループ・ダイナミックス学会担当：糸魚川・岡田)
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル
TEL: 075-415-3661 FAX: 075-415-3662 e-mail : jgda@nacoss.com

◆学会運営・対外業務関連は

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局
〒739-2695 広島県東広島市黒瀬学園台555-36
広島国際大学 心理科学部 臨床心理学科 西村太志研究室
E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

◆投稿論文・学会誌編集関連

日本グループ・ダイナミックス学会編集事務局
〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6-19-1
九州大学大学院人間環境学研究院 人間科学部門心理学講座 山口裕幸研究室
E-mail : jjesp_ed@hes.kyushu-u.ac.jp

◆ぐるだいニュースの編集・記事の投稿、メールマガジンへのニュース記事投稿、新刊案内や研究会案内等のニュース記事、公募情報などは

静岡県立大学看護学部 西田公昭研究室
〒422-8526 静岡市駿河区谷田52-1
TEL: 054-264-5486 Fax : 054-264-5099 (大学事務局)
E-mail : office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。
また、マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も、同アドレスまでお送りください。

◎ (編集後記) (編集子)

メルボルンのICAP2010に参加しました。学会合間にいろいろと飲み食いしましたが、おいしかったのは牡蠣とワインでした。研究の面白さとワインの美味しさを教えてくれた先生方に感謝感謝です。…カラマワリ古谷／ 本号では、海外での研究発表者の報告と、巷で流行っている新しい集団コミュニケーションについて、企画してみました。最近は本当に海外で発表なさる方が増えたなあ実感しております。ところで私は、とうとう50歳になってしましまして、我が天命とは何かを思い悩んでいます。難しい課題であります。さて、ともかく猛暑の折ですが、どなたさまにも自重していただいて、川越にて

元気にお会いしたいものです。…コウネンキ西田
